

電気化学協会九州支部30年に当って

清山哲郎（九州大学名誉教授）

電気化学協会九州支部が設立されてから30年ということ誠に目出たいことですが、また感慨深いものがあります。九州支部は関西支部から分離独立したのですが、伊藤尚先生、坂井渡先生らが中心になって大筋の話を進められました。当時私は若手の教授でしたので支部設立の実務をやらされ、関西支部の吉沢先生、その下の助手の石川さんらに支部の事業と事務のイロハを色々と教えていただくとともに、分離独立の引継ぎを進めたのです。初代の支部長は三井金属三池製錬所長の小泊氏（途中で草野氏に交代）でした。発足に当ってはいまできたばかりの福岡の天神ビルで発足記念講演会を行ないましたが、東京でもまだ新しいビルが建てられていない時期でしたので、東京本部の方々に素晴らしいビルだといやに感心されたことを覚えております。そのあとの懇親会は料亭「岩永」でやりました。博多芸者の全盛時代でも若くて美人の芸者衆に盛り上げてもらって皆酔いつぶれたのもです。当時は日本の化学工業、金属工業の発展期であり、大学も企業も発刺としており、産学の連携も自ら緊密であったと思います。それから30年、社会も産業も変遷を重ねてきており、電気化学協会も時代とともに変貌してきています。従って、運営上難しい面もでてきていますが、電気化学が色んな学問分野、あるいは色々な産業分野とかわる幅広い展開をしてきていることもあって、協会が発展しつつあることは御同慶にたえませぬ。

所で九州支部についてですが、九州と云っても山口県を含めて発足したのですが、これは正解でした。山口なくして九州支部は成立たないことを実感しています。私は長年支部運営の一端をになってきました。支部としては電気化学と云うよりは工業物理化学に主眼をおこうと云うことで、皆が知慧を出しあってその色々なジャンル、その色々な切口からの講習会を催すなどして電気化学周辺の学際的領域の開拓をはか

りましました。各自がいわば二足、三足の草鞋をはいて年月を重
ねてきたので、それがは好結果をもたらし、はたと自賛して
ます。支部の大学関係には今や精銳が多数輩出し、ており
誠に欣ばしくかつ頼もしいこととして、11月18日に記念式典と祝
支部設置30年の記念行事として、11月18日に記念式典と祝
賀のパーティーを簡素に行い翌日から3日間をわたり福岡と
際シンポジウム「地球環境とエネルギー」を開催するこ
なりました。このテーマについてはおき、日本は色んな面か
寄与を世界の国々から要望され、おき、日本は色んな面か
ら対策が重要であるというこのオールイブの産学現役の方々に
義な記念行事をうましました。幸いに各方面の御理解と御支
す。シンポジウムはそそのオールイブの御理解と御支
御た盛に終えましました。呼びつるこを願って見を参考
論議は内外に大きな反響を呼びつるこを願って見を参考
産業界の対応する活動を加速するこを願って見を参考
最後にこれかから九州支部についで勝手な私見を参考
に述べさせている私自身反省の弁でもありますが、一方支
連なっている時代とともに変りつつありますが、一方支
い。協会は時代とともに変りつつありますが、一方支
かして、終局の所は、私も支部を一つづつづつづつづつづつ
学的、技術的に刺激しあい、協力するといふこが、こ
こと、しかもそれが又会員と支部の発展にもつなごるこ
有難いと思います。そこで第一に上の支部のありよは多
考えてみます。そこで第一に上の支部のありよは多
とを述べてみます。第一に上の支部のありよは多
るいは役割からみて、最近の支部のありよは多
ンネリ化してありますが、年月を経ると当然そう富んだ
がそうでありますが、年月を経ると当然そう富んだ
しかし、それでは困る事業が、年月を経ると当然そう富んだ
かとも at home である事業が、年月を経ると当然そう富んだ
ことは刺激がなく、保守退嬰的であり、形式に流れること
彩鮮さと躍動感が失なわれることとです。若い人は

を出してほしい。第二に、電気化学そのものが、古典的な electrochemistry から発して、その稼辺の諸分野に随分と延び、それによってまた興味ある新しい分野が拓けつつあります。その幅広い extension を考えると、そういう周辺の方々や企業に積極的に参加してもらうことが望ましいと思えます。私は数十年前、選択透過膜の研究を始め、その後しばらくして化学センサの開発にとり組みました。当時、私どものやっでていることは、“電気化学屋”から異端視されていまして、
“われわれは電気化学の外野観覧席だ”と自称してまいりました。しかし今ではこれらは電気化学の field のしかも重要な部分に入っています。これからも判るように周辺の分野には魅力があり将来性があります。それらと手を携えることは重要なことでしょう。第三には九州支部という地域の特性を考慮すると、まずは沖縄、ついで東アジア諸国との連携を推進することでしょう。わが国の南西諸島の国土と人材をあてる意味では忘れられていまして、そのことを反省し、手を携えて発展をはかることは双方にとって大切なことです。又、九州に隣接する東アジア諸国との交流協力を推進することも重要なことです。これらはいずれも九州が首唱して表面的でなく実質的な取組みをすべき立場と時機にあります。21世紀における日本のありべき姿を想うとき、おろそかにしてはいけないことだと思っております。このたびの国際シンポジウムはそういった思いもあって企画したので、以上勝手なことを書きましがいくらかでも頭にとどめていただければ幸甚です。